

ユダはどこへ入ったのか？

ユダはどこへ入ったのか？

学校で百人一首を習った中学生の娘が、ある日、参考書をのぞいて驚嘆して言った。

「うわあ、ぬあんだ、これは！ 逢ひ見ての後のところに比ぶれば、ってゆうのは、男女の契りを結んだ後では、っていう意味なんだって。知らなかったあ」

それから憤懣やるかたないといったふうには、

「でも、ただ逢ったっていうことがどうしてそんな意味になるのかなあ。

まったく、逢ったって言うくらいのものでそんな疑いをかけられたんじゃないよ、たまったもんじゃないわよ」

ものごころついて以来、ずっと男女共学の場で育てられた彼女としては至極当然の感想を言う。

そこで私は、いにしえの日本の特権階級が、今のあなたがたと違って、いかに奥ゆかしい生活をしてきたか、たとえ兄弟姉妹の間柄でも、男女が顔を合わせることがどんなに珍しいことであったか、解説におよんだのであった。

たとえば『源氏物語』で、男が女の所に入った、といえは、それは人になんと疑われてもしかたの無い関係になったと解釈するべきなのである。だから、宇治十帖の「総角」で、

世に知らぬ心細きのなぐさめには、この君をのみ、頼みきこえたる人なれば、思ひ、かなひ給ひ、世の常のすみかに、うつろひなどし給はんを、「いと、めでたかるべきこと」に言ひあはせて、「ただ、入れたてまつらん」と、みな、かたらひ合はせけり。

ユダはどこへ入ったのか？

女房たちが相談したのは、もちろん薫大将の手引きをして大君の部屋にお入れしようということにはちがいないけれども、それよりは、ひたすら薫を頼みの綱と心得た彼女らが、ひよっとすると人並に京にも住めるようになるかも知れないと思っ、この際ふたりを夫婦にしておおうとした、と読むべきだろう。

この「総角」という章は、男女のぬきさしならぬ関係が、もっぱら「入る」と「出る」ということで表現されていて、薫大将と匂宮というライバルが大君、中君の姉妹の居所へさまざまな入り方、出方をし、それに人々の思惑がからんで、すこぶる興味深い。もつとも、この章に関する限り、男は寢室まで押入ったとしても必ずしも思いを遂げるわけではなく、独身をつらぬこうとする大君の、薄幸だがしかし清劉な生き方に覚える哀愁とはまったく別に、ウーマン・リブと同時代を生きている私としては、いくら宿世に流されるのが常の古い女でも、その気もないのに人の言いなりになるわけのものじゃあないのよと、変に意気がつてみたくもなるのである。

生活様式の差ということを別にしても、男女の契りを結ぶということは、これを表現するのに、古今東西を問わず人はなかなか苦心するものであるようだ。和歌などでもそうだけれども、もうすこしくだけた邦楽、たとえば長唄とか清元、常盤津などの文句には、表向きは上品に風景のことなどいっておいて、裏でそうしたたぐいのことをほめかすということがしょっちゅうで、暫くたってから不意に気がついて、「おやまあ」と思ったりするけれども、さりとて表向きの意味は些かなりとも変わるわけではない、分っている人には分っている、分らない人には分らないと、さり気なく聞き流すのがひそやかな楽しみになるだろう。

ブルーストの『失われた時を求めて』の劇中劇ならぬ小説中小説の『スワンの恋』には、「カトレヤをする」という言い方が出てくる。女道楽にかけては右に出る者のなかったスワンが高級娼婦あがりのオデットと初めて深い関係になったとき、彼女のドレスの胸元についているカトレヤの花を直したからである。そののち何回かスワンは同じ口実でオデットに手をふれる、「おや、今夜はカトレヤの花がついていない。直すことができな

いね。」などと言いながら…。

ユダはどこへ入ったのか？

(…)そして、それからずっとあとになって、もうカトレヤの花を直すことを(あるいは儀式的にその振りをすることを)、しなくなつて久しくなつてからも、「カトレヤをする」という暗喩は、肉体的所有行為——と言つても、ひとは何も所有することはしないのだが——のことを言おうとするときに、カトレヤのことなど考えもしないで用いる単なる語彙として、二人の言葉使いのなかに生残つた。

やがて冷やかなオデットに、スワンが遠慮がちに言う日がくる。「それじゃあ今夜はカトレヤは無しかい。僕は、ちよつとしたカトレヤ *un bon petit catleya* があれば良いなと思つていたんだけど」

聞くところによると、ブルースト以来、カトレヤという言葉は、フランス人の間で一種微妙なニュアンスを帯びるようになったそうである。そしてブルーストというのは、フランス人でもちよつと気軽に読みこなすわけにはいかない面倒な作家なので、このニュアンスには、ブルーストを知つ

ている人にしか分るまいという知的エリート意識も加わつて、なおのこと微妙なものになつていくに違いない。

聖書もまた、こうした言回しの宝庫である。特に旧約聖書は、つまるところイスラエル人というきわめて家族的な民族の歴史、というよりは系図そのものだから、誰と誰から誰が生まれたということ以上に重要なことはない、とも言えるのである。当然、それにまつわる表現も豊富で、有名な「人(アダム)はその妻エバを知つた」に始まつて、『源氏物語』流に「所に入る」ことも稀ではない。

ところで、日本語の聖書というのが、私にはどうにも読みづらい。いや、読みやすいことは読みやすいのだが、何を言っているのだから、もうひとつピンとこないということがよくあつて、そんな時はフランス語訳をみると、一目瞭然のストレートな言い方をしているので、ああそうか、と一も二もなく納得する。

「所に入る」というのもその良い例で、私は仏訳の聖書でこれと同じ言回しを見た覚えが一度もない。聖書を日本語に訳した人たちは、いったいどこからこれを引っぱつてきたのだろうか。『源氏物語』のような日本古

ユダはどこへ入ったのか？

典に関する教養の然からしむるところか、あるいは聖書の原典のヘブライ語かギリシャ語に似たような言い方があるのだろうか。一度誰かに聞いてみたいと思いつながら、ことがことなので何となく輝られて、まだ果せずにいる。

もっとも『源氏物語』と同じとはいっても、読んで受ける感じは甚しく違う。一方の秘めやかな雰囲気に対して、こちらの方は何やらひどくみもふたもない感じがするのは、読んでいる私の感受性に信仰という紗布^{ベール}がかかっていないせいだろうか。例えば『創世記』第一一八章の「ユダとタマルの物語」を読んだ時には、奇妙なショックすら覚えた。

タマルはユダの長男のエルに嫁入りしたが、いまだ子を持たずして夫に死別れる。次男のオナンも彼女と結ばれることを拒否して死に、タマルは寡婦として父の家に戻された。そこで彼女は舅ユダによって子を得るべく、ティムナへ旅立った彼を待ち伏せる。

14タマルはやもめの着物を脱ぎ、ベールをかぶって身なりを変え、ティムナへ行く途中のエナイムの入口に坐った。シエラが成人したのに、



自分がその妻にしてもらえない、と分かったからである。15ユダは彼女を見て、顔を隠しているので娼婦だと思った。16ユダは路傍にいる彼女に近寄って、「さあ、あなたの所に入らせてくれ」と言った。彼女が自分の嫁だとは気づかなかったからである。

相手は路傍にうずくまる娼婦である。ちなみに、『旧約聖書略解』（日本基督教団出版局）によれば、15節にあるこの語の語原は「聖女」（神にささげた女の意）であって、もともと神殿に関係があったが、後には道のかたわらに台を設け、通るものに身をまかせていた、とある。

とすれば……あれっ？ と私は何やら落着かない気分になりながら考えた、「あなたの所に入らせてくれ」と言ったとき、ユダは一体どこに入るつもりだったのだろうか。

（初出 「学燈」一九八八年三月号）